

カシュカーイーとファールス地方

河田久美

はじめに

イラン史における遊牧部族の重要性は今更指摘するまでもない。18世紀後半に成立した Qājār 朝も彼らが打ち立てた王朝であり、支配下のイラン各地には多くの強力な遊牧部族が割拠していた。そのような遊牧部族の中に、南部の Fārs 地方で活躍した Qashqā'i がおり、同地方において一大政治勢力を形成していた。

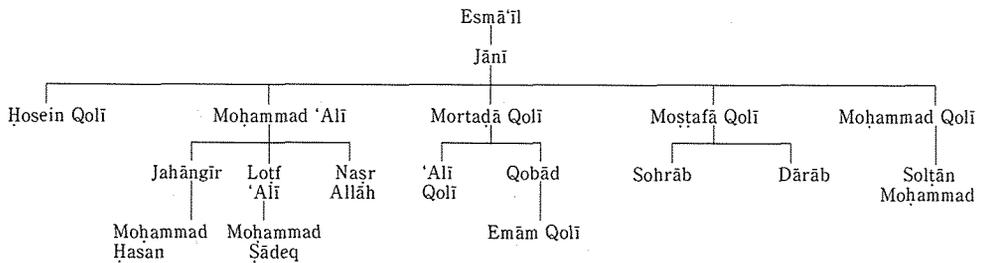
現在、カシュカーイー研究は、Obering の歴史的研究 [Obering 1974] と Beck の文化人類学的研究 [Beck 1986] に大別される。我々は、前者によってカージャール朝初期から今世紀半ばまでのカシュカーイーの政治的動向をたどり、後者によってそれ以降に彼らが被った政治的・社会的変化や、内部の社会的構造、現代の生活に関する知識を得、歴史研究の一助とすることができる。しかしカージャール朝時代のカシュカーイーについての研究は、有力者の政治的動向を通時的にたどったオパリングの研究から一向に進んでおらず、カージャール朝以外の外部勢力との関係、カシュカーイー有力家系内部の勢力関係等、多くの問題が残されている。特にファールス地方内の各地域とカシュカーイーとの関係という空間的見地からは、夏营地・冬营地の指摘以上のことはあまりなされていない。

そこで本稿では、カシュカーイーとファールス地方内の各地との関係を、夏营地・冬营地だけでなく、政治的側面、私有地の所在といった観点も含めて考察する。主要史料はファールス地方の年代記及び地誌である FN と、イギリスの agent のイラン人が記したファールス地方の時事報告 VE である。対象とする時代はおおよそカージャール朝成立期から、FN の執筆が終了した1304/1887年までとし、必要に応じて、この対象時期外にも言及する¹⁾。

I カージャール朝時代のカシュカーイー

カシュカーイーはいくつもの遊牧部族集団の連合体であり、そのエスニシティーは一様でないが、大半はトルコ系である [Obering 1974 : 27]。また "Qashqā'i" の語源については、トルコ語の "qachmaq" (逃げる) などの説があるが定説はない [Obering 1974 : 32-34 ; Beck 1986 : 43-44]。彼らの夏营地・冬营地は、ファールス地方のカージャール朝地方政庁所在地 Shīrāz を挟む南北、すなわち前者が同地方北部の山岳地帯、後者が同地方中南部に広がっている。

FNによると連合体カシュカーイー(Īl-e Qashqā'ī)は66の部族集団(tīre)で構成されていた[FN:1582]。そしてカシュカーイー全体は、遅くともカージャール朝に先立つZand朝の時代から ilbegīなる地位の保持者を輩出する Shāhīlū 家によって支配されていた。FNによればカージャール朝時代の1234/1818-9年、それまでイルベギであった同家の Jānīが、王朝から ilkhānī に任名され、息子 Moḥammad 'Alī がイルベギとなった²⁾[FN:719]。イルハニの主たる義務はカシュカーイーからの徴税であり[Beck 1986:29; Tapper 1991:518-519]、これ以後、シャーヒールー家が輩出するイルハニと彼を補佐するイルベギによるカシュカーイー支配体制が続く。歴代イルハニ、イルベギ、及びシャーヒールー家の人名は系図と表1を参照されたい。



典拠 FN:1100-1103

系図 Shāhīlū 家

ilkhānī	ilbegī
Jānī(1234-1239)	Moḥammad 'Alī(1234-1239)
Moḥammad 'Alī(1239-1268)	Mortaḏā Qolī(1239-1249)
	Moḥammad Qolī(1250-1268)
Moḥammad Qolī(1268-1284)	Jahāngīr(1268-1288)
Solṭān Moḥammad(1284-)	'Alī Qolī(1288-1292)
	Dārāb(1292-)
	Naṣr Allāh(1294-)

典拠 FN:1100-1103; VH:39,71

1292年から1304年までに、イルベギ位は Dārāb と Naṣr Allāh の間を最低8回は往復した [VE:39,71,92,137,190-191,241,255-256,261,273]。

表1 ilkhānī・ilbegīの在位年代(1304/1887年まで)

カージャール朝とザンド朝の抗争時代、カシュカーイーは後者に味方していた。そのためシャーヒールー家の人々は、カージャール朝の創始者 Āqā Moḥammad が没する1211/1797年まで、ザグロス山中に身を潜めていたと言われている [Obering 1974:42]。しかしカシュカーイーは徐々に頭角を現し、遊牧部族という軍事的性格故に、王朝側にとって両刃の剣となった。例えば、ファールス地方住民の不満をかっていたファールス地方知事の近衛兵とその家族の同地方からの追放に大きな役割を果たし、知事にとって厄介な存在であったにも拘

ならず[長谷川 1992 : 25-28], 彼らがファールス地方政庁有力者に反発して隣接する Kermān 地方への移住を企てるや, 知事は自ら出向いて引き留めた [FN : 748-751 ; RŞ X : 35-37, 39 ; NT II : 108-110]。強力な遊牧部族の移住は, 税収のみならず軍事力の喪失でもあるからである。実際, ファールス地方政庁軍としてのカシュカーイーの活躍も, 史料に見いだすことができる [FN : 798, 801, 809, 814-817, 825, 826 ; RŞ X : 576, 720, 734-742 ; NT III : 248, 259, 260, 266-268, 270, 271, 274-276, 280 ; HA : 204-209]。

このようなカシュカーイーの制御に, カージヤール朝は硬軟両面の方策を用いた。すなわちシャーヒールー家の有力者をイルハニに任命し, カシュカーイーの徴税と統制を任せ, また同家の者をファールス地方知事の娘やシャーの姉妹と結婚させた [FN : 727, 1101 ; RŞ IX : 718]。その一方で, 知事は機会を窺ってイルハニ及びイルベギを攻撃し [FN : 756-758 ; RŞ X : 75-76 ; NT II : 124-126], シャーはイルハニを人質として10年以上にわたり自分の許に留め置いたこともあった [FN : 768, 790, 1101 ; RŞ X : 364 ; NT II : 231 ; III : 227 ; HA : 56]。1278/1861-2年, 時のシャー, Nāṣer al-Dīn の命令により, ファールス地方の地元有力者 Qavām al-Molk のもとに, 同地方の五つの遊牧部族の連合体 Khamse が結成されたが, これは言わば「上からの」Qashqā'i 対抗勢力創出として知られている [FN : 967 ; Obering 1974 : 65 ; Beck 1986 : 79]。

このようにカシュカーイーはファールス地方において看過できない政治勢力であり, カージヤール朝末期の立憲革命, 第一次世界大戦を経て, Pahlavi 朝からの弾圧を受けるまで, 相当な影響力を保つのである。

II カシュカーイーとファールス地方

ファールス地方はイラン南部に位置し, その南縁はペルシア湾岸である。中心都市はほぼ中央部にあるシーラーズで, ここにはファールス地方の地元有力者が居を構え, カージヤール朝中央から赴任したファールス地方知事が, 同行して来た家族, 側近, 軍隊等と共に暮らした。ところで, シーラーズ以外のファールス地方内部は bolūk という小地方に分かれており, FN によればその数は65³⁾である。FN, VE では, ボルーク名でファールス地方内の特定地を示す場合が多いので, 本稿でもボルーク単位でカシュカーイーとの関係について考察を進める。

1 カシュカーイーとシーラーズ

まずカシュカーイーとシーラーズとの関わりを見ておこう。ここでの考察対象は, 史料の記述の制約上, カシュカーイーの中でもシャーヒールー家に限定される。

カージヤール朝時代, シーラーズは11の街区 (maḥalle) に分かれていたが, FN ではシャーヒールー家は「カシュカーイーのハーンたちの素晴らしい一族」(Selsele-ye Jalīle-ye Khavānīn-e Qashqā'i) として⁴⁾, Meydān-e Shāh 街区の名士に挙げられている [FN : 1100-1103]。Afsar の研究によれば, 彼らの住居はこの街区の西部にあった [Afsar 1353

: 279], シャーヒーラー家がカージャー朝時代に造営, 修理・増築という形で関わったシーラーズの造営物も当街区に集中している。具体的には, 庭園(bāgh)が二つ⁵⁾, masjid, 公衆浴場(ḥammām), 廟(boq 'e), ホセイン殉教劇場(ḥoseiniye)が各々一つある⁶⁾。またシーラーズ近郊にも、同家ゆかりのバグ, 受難劇場(takiye), キャラバンサライが一つずつある⁷⁾。

これだけ多くのシャーヒーラー家ゆかりの庭園や建造物が存在すると, 彼らは他のカシュカーイーと共に夏営地・冬営地を往復する生活をせず, ほとんどシーラーズに居住していたのだろうかとの疑問が湧く⁸⁾。前章で述べたように, シャーヒーラー家は1211/1797年のアーガー・モハンマド死去まで避難生活を送っていたが, 1234/1819年にはジャーニーがイルハニに任命されており, この時まで不遇時代が終わっていたはずである。しかし, それ以後1290年台まで, シャーヒーラー家がいつ, どのような場合に, どれ程の期間シーラーズに滞在したかを示す記述は史料中にあまり見いだすことができない⁹⁾。1290年台に入ると VE によって, シャーヒーラー一家の人々のシーラーズへの出入の様子がわかる。それによれば, イルハニヤイルベギは毎年春頃に税務のためシーラーズを訪れ[VE: 73, 89, 122, 184, 186, 214, 286], この定期的訪問の他に様々な理由でシャーヒーラー一家の人々は不定期にやって来たが¹⁰⁾, たいていはシーラーズから離れて過ごしていたようである。

2 カシュカーイーとボルーク

次にカシュカーイーとボルークとの関係を, 以下の三点について見ていく。

(a) 生活圏。ここではカシュカーイーが実際に生活の場としていたボルーク, その可能性のあるボルークを抽出する。「生活の場」であることが最も明確なのは夏営地・冬営地とされているボルークである。そこで, 初めに FN の夏営地・冬営地を列挙した箇所[FN: 1581]に現れるボルークを, 関連情報を付け加えつつ掲げ, 続けて生活の場となっていた形跡のあるその他のボルークについて述べる。

(b) ボルーク統治。ファールス地方知事はボルークごとに徴税を主な任務とする dābet, ḥākem と呼ばれる統治者を任命した¹¹⁾。この項目では, カシュカーイーを統治者に戴いたボルークを取り上げる。その際, 統治期間が不明か10年程度までの短期間に終わったボルークと, 長期間統治が続いたボルークに分け, 統治期間判定の根拠とともに, 統治者や統治の時期について記す。

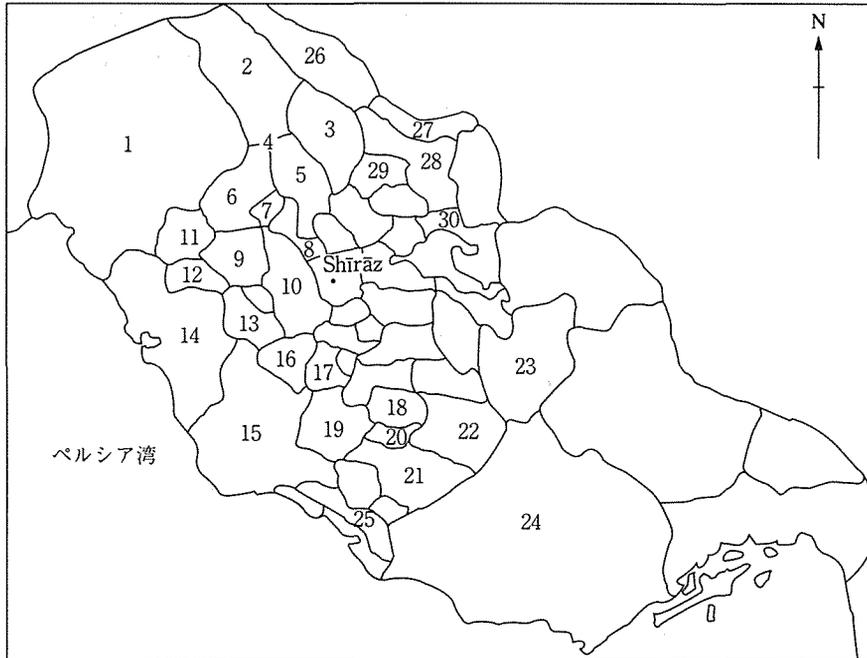
(c) 私有地。カシュカーイーの私有地の存在が知られているボルークを掲げる。なおボルーク名に付した番号は, 地図と表2のボルーク番号に一致する。

(a) 生活圏

(i) FN で夏営地とされているボルーク

Sarḥadd-e Sheshnāhiye—2

1236/1834年の春から夏にかけて, 遊牧部族 Bakhtiyārī とカシュカーイーとの, 夏営地をめ



1 Kūh-e Gelūye	11 Māhūr-e Milāti	21 Khonj
2 Sarḥadd-e Sheshnāhiye	12 Khesht	22 Bīdshahr o Jūyom
3 Sarḥadd-e Chahārdānge	13 Jere	23 Dārāb
4 Dez-e Kord	14 Dashtestān	24 Lārestān
5 Kāmfrūz	15 Dashti	25 Galledār
6 Mamassanī	16 Farrāshband	26 Eqḗid
7 Ardekān	17 Fīrūzābād	27 Bavānāt
8 Beīdā	18 Qīr o Kārzīn	28 Qūnqorī
9 Kāzerūn	19 Arba'e	29 Mashhad-e Omm al-Nabī
10 Kūh-e Marre-ye ShKFT	20 Afzar	30 Ābāde-ye Tashk

Demorgny : Carte 1 をもとに作成。ボルークの境界，ファールス地方の範囲は，FN が執筆されていた頃とは若干異なると考えられる。Dez-e Kord (4) はおおよその位置のみ示す。

ぐる抗争がおきている [FN : 720-721]。1263/1847年のノウルーズよりあと，ファールス地方知事はイルベギ Moḥammad Qolī を討つために来たが，初夏にはシーラーズに戻っており，この遠征は春から初夏にかけて行われたことがわかる [FN : 785]。この二つの事例は，春から夏にかけてここで過ごすカシュカーイーの存在を明示している。

Sarḥadd-e Chahārdānge— 3

1291/1874年初夏，ファールス地方知事はカシュカーイーの税務 (mo'āmele-ye māliyāt) のため，Ardekān とこのボルーク内の Khosrou Shīrīn に軍を派遣した [VE : 10]。

Dez-e Kord— 4

Kāmfrūz— 5

夏営地であると同時に，イルハニのジャーニーの息子で，定住生活に入ったと思われる Ḥosein Qolīとその子孫が代々居住する地であった [FN : 1101]。

Mamassanī— 6

Lor 族の Mamassanī が多く住むボルークであるが、このボルークの Kākān 地方と KMHR 地方がカシュカーイーの夏営地で、ママッサニーとの軋轢も年代記に書き残されている [FN : 779-80 ; NT II : 360]。

(ii) FN で冬営地とされているボルーク

Māhūr-e Mīlātī—11

Khesht—12

Jere—13

1300/1886年冬、ファールス地方政庁高官 Şāḥeb Dīvān が、カシュカーイーからの徴税を辞退したイルハニの Soltān Moḥammad とイルベギの Naşr Allāh を追って、向かおうとしていたのが、このジェレと Fīrūzābād であった [VE : 177]。

Dashtestān—14

1889年から翌年にかけてイランを旅した Curzon も、冬営地の存在を記している [Curzon II : 112]。

Dashtī—15

1849年から1853年までイランに滞在した Sheil も19世紀中頃、冬をここで過ごすカシュカーイーがいると記している [Sheil : 399]。

Farrāshband—16

Arba'e—19

Afzar—20

1304/1887年冬、かつてのイルベギ、Mortaḍā Qolī の孫 Emām Qolī が滞在していたのが、このボルークか Khonj であった [VE : 281]。FN が執筆されていた当時、カシュカーイーが利益の少ない簡単な耕作 (zerā'at-e mokhtaşari) をしていた [FN : 1262]。

Khonj—21

1291/1874年冬、シャーヒール家の Dārāb は、このボルークにある Shahriyārī 要塞を攻略した [VE : 20, 21]。上述のとおり、モルタザー・コリーの孫がここにいた可能性がある。

(iii) その他のボルーク

Kūh-e Gelūye—1

1293/1876年から1297/1880年にかけて、当時のイルベギ、ダーラーブの存在を示す記述が散見される [VE : 62, 101, 127]。この時期、当ボルークはカージャール族の Soltān Ovais Mirzā に統治されていたが、ダーラーブはクーフ・ギルエという土地よりも、彼とのつながりゆえに、ここにいたようで、1298/1881年のファールス知事交代に伴い、このボルークの統治者が替わると、ダーラーブのクーフ・ギルエでの活躍も見られなくなる。しかし二人の結び付きの背景を論じるだけの能力を、現在の筆者は持たないので、事実の指摘のみにとどめる。他には1300/1883年、カシュカーイー内部の不和から、一部が移動して来たという記述がある [VE : 180]。

Ardekān—7

Sarḥadd-e Chahārdānge の項で述べたように、1291/1874年夏、税務のためこのカシュカーイーに対し軍が派遣され、1293/1876年の同じ時期に、シャーヒーラー家のダーラーブと 'Alī Qolī との間で抗争があった [VE : 58]。また1305/1888年夏には、このボルークや Beidā のカシュカーイーにペストが流行した [VE : 316]。以上の事例から、1290年以降、夏季には、ここで過ごすカシュカーイーがかなりいたと考えられる。

Beidā—8

1291/1874年夏、ファールス地方知事がシャーヒーラー家の Sohrāb を捕らえさせたのがこのボルークである [VE : 14]。1300/1883年春と1302/1884年の晩夏または初秋に、カシュカーイーによる略奪があった [VE : 186, 232]。またアルデカーンの項で記したように、1305/1888年夏、ここでもカシュカーイーにペストが流行した。隣接するアルデカーン同様、ここで夏を過ごすカシュカーイーがいたものと思われる。

Kūh-e Marre-ye SHKFT—10

1291/1874年秋、このボルークの Kūdiyan という所にカシュカーイーがおり、イルハニのソルターン・モハンマドが赴いた [VE : 16]。また1295/1878年春と1300/1883年夏には、カシュカーイーによる略奪、カシュカーイーの略奪者捕縛が報告されている [VE : 87, 196]。

Fīrūzābād—17

FN では冬営地に挙げられていないが、以下の数々の事例より重要な冬営地であったと考えられ、冬営地群に含めなかった FN の著者の意図が理解しかねる。まず1256/1850年、この地を訪れた Abbott は、イルハニのモハンマド・アリーに会い、当時はイルベギであったモハンマド・コリーの邸宅と広大な庭園があると伝えている [Abbott : 175]。1295/1878年春、イルハニのソルターン・モハンマドが税務のためここからシーラーズに赴いており [VE : 89]、1881年3月に Stack はここで彼に会っている [Stack I : 85-90]。同様にこのボルークが彼の晩秋から春にかけての滞在地であったことが、VE の1300/1882-3年、1304/1886年の記述、本稿の対象期間をやや越えるが1305/1886年、1307/1889-90年などの記述で確認できる [VE : 177, 184, 198, 277, 300, 349]。カーズンはここがイルハニの “official residence” であると言っている [Curzon II : 228]。また1291/1874年秋、ファールス地方政庁はダーラーブの動きを牽制する軍を派遣した [VE : 16]。このようにシャーヒーラー家有力者の冬の滞在地であったこのボルークは、カーズンが記すとおり、カシュカーイーの中心地と言えよう [Curzon II : 112]。

Qīr o Kārzīn—18

第I章で触れたケルマン移住事件の際、移動開始直前の1247/1832年春、イルハニのモハンマド・アリーがいた場所である [FN : 749]。1266/1850年春、アボットは、このボルークにある要塞を攻撃しているイルベギのモハンマド・コリーに会い [Abbott : 168]、彼の冬の住居とイルハニ、モハンマド・アリーの家族のキャンプを目にした [Abbott : 172]。1291/1874年初

めの冬、シャーヒーラー家のソフラーブを追うファールス地方政庁の使者は、ここに至り[VE : 4], 次の冬、やはり地方政庁に追われていたダーラーブは、自分の貯蔵物を取りに来た[VE : 23]。以上の事例から、FN では冬営地に挙げられていないが、シャーヒーラー家の根拠地のひとつであったと推測される。

Bīdshahr o Jūyom—22

1292/1875年冬、ファールス地方知事は、シャーヒーラー家の Qobād の息子たちの捕捉、治安維持、徴税のために、このボルークへ人を派遣しようとしていた[VE : 45]。

Lārestān—24

シェイルは冬を過ごすカシュカーイーがいると記しており[Sheil : 399], カーゾンも同趣旨のことを言っている[Curzon II : 112]。1295/1878年と1300/1883年春に、カシュカーイーによる略奪が報告されている[VE : 84, 185]。

Eqīd—26

イルハニ、モハンマド・アリーの孫 Moḥammad Ṣādeq は、母親がこのボルークの kalāntar の子孫であるという縁で、FN 執筆当時、首邑 Ābāde に住んでいた[FN : 1101]。

Qūnqorī—28

カシュカーイーから分離して定住したといわれている Khalaj 族の居住地¹²[FN : 1424]。カーゾンによると、春にはこのボルークの Dehbīd という地を、季節移動するカシュカーイーやその他の部族が、ミルクをパンに交換しつつ通過するという[Curzon II : 70]。

(b) ボルーク統治

(i) 長期間統治されたボルーク

Sarḥadd-e Sheshnāhiye—2

1249/1833-4年、ファールス地方知事はカシュカーイーの有力者弾圧を試みたが失敗、一旦捕えられたイルハニのモハンマド・アリーは解放され、以前同様このボルークを含むいくつかのボルークの統治権 (dabt) を与えられた[FN : 758]。従って、彼は1249年以前からこのボルークの統治者であった。モハンマド・アリーは1268年に没したが[FN : 1101], このボルークの統治者は、約半世紀後の1292/1875年、ダーラーブがイルベギ就任に統治権を獲得するまで知られていない[VE : 39]。ダーラーブはFN が執筆されていた当時も統治していた。FN の同じ箇所によると、「昔から現在まで常に」統治権 (hokūmat o ḡābetī) はシャーヒーラー家にあった[FN : 1358]。よって、このボルークの統治権は遅くとも1249年頃以降は、同家であったと考えられる。

Sarḥadd-e Chahārdānge—3

サルハッド・シェシュナーヒエ同様、1249年にモハンマド・アリーに再度与えられたボルークで、FN に拠るとこの統治権もやはり「昔から現在まで」シャーヒーラー家にあり、FN 執筆時は、1256/1840-1年生まれの名スロラーが若年より統治していた¹³。このボルークも

遅くとも1249年頃以降、シャーヒーラー家に統治されていたとみてよい。

Dez-e Kord—4

このボルークの統治権も、FN に拠れば「昔から現在まで」シャーヒーラー家にあり [FN : 1319], VE によれば1298/1881年には、イルハニのソルターン・モハンマドが統治していた [VE : 140-141]。

Kāmfirūz—5

サファヴィー朝末期以来、カシュカーイーを構成するティーレの一つで Chārde charīk に属する家系が代々統治してきたが、FN 執筆時には、この家系は統治権を失い、シャーヒーラー家のナスロッラーが若いころから統治していた [FN : 1102, 1451]。

Jere—13

FN に拠ると、統治権は長年 (sālḥā) シャーヒーラー家にあり [FN : 1276], FN 執筆時にはアリー・コリーが若年から統治していた [FN : 1102]。

Farrāshband—16

FN が著された百年以上前から統治権はシャーヒーラー家にあるという [FN : 1385]。FN 執筆の百年前にはアーガー・モハンマドが存命で、カシュカーイーにとっては苦難の時代であったから、この言葉は額面どおりに受け入れられないが、以下の事例より、長期間シャーヒーラー家が支配したことは裏付けられる。まず、このボルークはサルハッド・シェシュナーヒーエなどと共に1249/1833-4年、イルハニのモハンマド・アリーに再度統治権が与えられたボルークのひとつであり [FN : 758], 1273/1856-7年には当時のイルハニ、モハンマド・コリーが統治していた [HA : 203-4]。その後、次のイルハニであるソルターン・モハンマドに統治権が移り [FN : 1103], カーゾンが旅した当時も、彼が統治者 (governor) であった [Curzon II : 112]。

Firūzābād—17

1200年台初めにはカシュカーイーの統治下にはなかったが [FN : 673, 918], 1249年にモハンマド・アリーに再度与えられたボルークには含まれていた [FN : 758]。FN 執筆時には、イルハニのソルターン・モハンマドが統治権を有し [FN : 1423], ファッラーシュバンド同様、カーゾンも彼を統治者 (governor) であると記している [Curzon II : 112]。1249年から約半世紀間の統治者の変遷が不明だが、FN 執筆時に、統治権をシャーヒーラー家が持つようになって、既にかかなりの年月 (chandin sāl) が経っていたから [FN : 1423], この期間にも、ほとんどシャーヒーラー家が統治していたと考えられる¹⁰⁾。

Arba'e—19

ここも1249年、モハンマド・アリーに再度統治権が与えられたボルークのひとつである [FN : 758]。1292/1875年、ダーラブのイルベギ就任と同時に、その統治下に入った [VE : 39]。非カシュカーイーも含め、このボルークの統治者に関する情報は他に無いので、二人の統治の間も、シャーヒーラー家の統治が続いていたと推測される。

Afzar—20

1249年にモハンマド・アリーが、1292年にダーラブが、アルバエと同時に獲得したボルークである。

Khonj—21

FN 執筆時まで、統治権は長年(sālḥā), シャーヒーラー家にあった[FN : 1303]。具体的事例として拾えるものは、アルバエやアフザルと同じである。

Bavānāt—27

隣接するクーンコリーに住むハラジュ族の Qāsem なる人物が、1200年台前半にイルハニの娘との婚姻により、このボルークの半分の統治者となったという事実から¹⁵⁾、具体的な状況は不明だが、シャーヒーラー家の影響力の強い土地であったことがわかる。その後しばらく統治者に関する情報は途絶えるが、1290年台以降は VE によって統治者の変遷を知ることができる。それによればバヴァーナートとクーンコリーは、あたかも一つのボルークのように、ほとんど同じ経緯をたどる。すなわち1292/1875年、カーセムの息子 'Abbās Qolī が両ボルークを得るが¹⁶⁾、翌年解任され[VE : 64]、間もなくバヴァーナートはシャーヒーラー家のナスロッターの統治下に入った[VE : 64]。彼の統治は短期間で終わり¹⁷⁾、このボルークはクーンコリーと共に、ファールス地方政庁有力者の息子など非カシュカーイーの支配を受けるようになるが[VE : 70, 136, 156, 158]、1299/1882年にはアッバース・コリーに再び二つのボルークの統治権が与えられた[VE : 158]。そして1305年頃からは、またナスロッターが両ボルークの統治者としてしばしば顔を出すようになる[VE : 314, 316, 334]。以上の統治者の変遷より、1200年台前半はシャーヒーラー家の間接的支配下に、同年代末からはしばしば直接的統治下にあったと言える。

Qūnqorī—28

バヴァーナートと同じく、ここに住むハラジュ族のカーセムがイルハニとの姻戚関係を契機に、ボルークの半分の統治者となった。1280/1863-4年頃に彼が死去してからは、息子アッバース・コリーが時々ボルーク全体を統治していたというのが FN 執筆時の状況である[FN : 1424]。1290年台以降の統治者の変遷は、バヴァーナートの項で既に述べた。

(ii) 中・短期間統治したボルーク

Mamassanī—6

1291/1874年、カシュカーイーのティーレのひとつ、Darreshūlī の有力者が統治権を得たが、翌年には失った[VE : 10, 30]。

Kāzerūn—9

1268/1851-2年と翌年、モハンマド・アリーの子 Jahāngīr が統治した[FN : 1101]。

Dārāb—23

上述のジャハーンギールが、カーゼルーンを統治する直前の二年間、このボルークの統治に定められていた[FN : 1101]。アボットも1850年3月、彼のこの地位を確認している[Abbott

: 158]。

Galledār—25

1298/1881年から翌年にかけて、シャーヒーラー家のダーラーブが統治者であった[VE : 139, 140, 144, 149, 155, 161]。

Ābāde-ye Tashk—30

1293/1876年、ジャハーンギールの子 Moḥammad Ḥasan の統治下に入り[VE : 63], FN 執筆当時も統治権があった[FN : 1101]。他に統治者に関する情報が無く、彼の統治が10年間続いた可能性もある。

(c)私有地

Sarḥadd-e Chahārdānge—3

FN 執筆当時、このボルークの土地の大半(bištar amlāk)が、シャーヒーラー家のナスロッラーの相続したり獲得した(mourūthī o moktasabī)ものであった[FN : 1102]。

Kāmfirūz—5

VE の1303/1886年の記事に拠れば、上述のナスロッラーの私有地(melk-e arbābī)であり[VE : 271], ほぼ同時期の FN の執筆時にも、このボルークの大半が彼が相続したり獲得した土地であった[FN : 1102]。

Mamassanī—6

Qāsem Khān Kashkūlī-ye Qashqā'ī なる人物が、このボルークの Kākān 地方を購入し、FN の執筆当時は彼の相続人が所有していた[FN : 1564]。

Firūzābād—17

スタックの報告によれば、1881年現在、イルハニのソルターン・モハンマドは、ここに世襲した土地を持ち[Stack I : 86], 大規模不在地主(large non-resident arbāb)であった[Stack II : 254]。

Mashhad-e Omm al-Nabī—29

1301/1884年現在、イルハニのソルターン・モハンマドの土地である[VE : 210, 212]。

さて、以上の情報から読み取れるカシュカーイーとボルークとの関係を整理してみよう。

まず生活圏に関しては、FN に列挙された夏营地・冬营地に、これに近接するアルデカーンとベイザーを夏营地として、フィールズアーバード、キール・オ・カールズイーン、ラーレストターンを冬营地として加えることができよう¹⁸⁾。そうすると、カシュカーイーの生活のあとが見られるその他のボルークも、クーンコリーを除くすべてが夏营地・冬营地に接することになる。そのうちクーフ・ギルエは、このボルークの統治者との人的つながりに関わる事例である可能性をすでに指摘した。またエクリードの場合は、遊牧部族カシュカーイーの活動の事例とは言い難い。しかし他のボルークのものは、クーフ・ギルエのような特殊な背景を

持たない、遊牧部族カシュカーイーの活動例である。そもそも遊牧部族の活動範囲がボルークの境界線と一致するとは考えられない。従ってこれらのボルークの土地も多少は夏営地・冬営地として使われていたか、近隣のボルークを夏営地・冬営地としているカシュカーイーがここにまで足を延ばすことがあったのであろう。

ここで改めて今まで言及したボルークを、夏営地、冬営地に分け、ボルーク番号順に配列し

ボルーク	統治期間	私有地の存在
夏営地		
Sarhadd-e Sheshnāhiye—2	長期	
Sarhadd-e Chahārdānge—3	長期	○
Dez-e Kord—4	長期	
Kāmfirūz—5	長期	○
Mamassani—6	短期	○
Ardekān—7		
Beiqā—8		
冬営地		
Māhūr-e Milāti—11		
Khesht—12		
Jere—13	長期	
Dashtestān—14		
Dashti—15		
Farrāshband—16	長期	
Firūzābād—17	長期	○
Qir o Kārzīn—18		
Arba'e—19	長期	
Afzar—20	長期	
Khonj—21	長期	
Lārestān—24		
その他		
Kūh-e Gelūye—1		
Kāzerūn—9	短期	
Kūh-e Marre-ye ShKFT—10		
Bidshahr o Jüyom—22		
Dārāb—23	短期	
Galledār—25	短期	
Eqlid—26		
Bavānāt—27	長期	
Qūnqorī—28	長期	
Mashhad-e Omm al-Nabi—29		○
Ābāde-ye Ṭashk—30	不明	

表2 カシュカーイーとボルークの関係

たその他のボルークとともに、カシュカーイーの統治を受けたものについてはその期間の長短を、また私有地存在情報の有無を示すと、表2が作成できる。この表を一瞥してわかるように、カシュカーイーが長期間統治したボルークの大半が夏営地か冬営地である。バヴァーナートとクーンコリーは夏営地でも冬営地でもないが、ここはいわば広義に取ればカシュカーイーに包含されるハラジュ族が、シャーヒーラー家との姻戚関係によって統治権を獲得したボルークである。他のボルークには見られないこの特殊な事情が、夏営地・冬営地から外れた土地での長期統治を実現させたものと考えられる。ボルークを長期間統治したカシュカーイーとは、ほとんどの場合、イルハニやイルベギをはじめとするシャーヒーラー家の人々である。イルハニ・イルベギの地位に結び付く任務は、遊牧部族カシュカーイーの徴税や統制であって、カシュカーイーの夏営地・冬営地があるボルークのそれではない。しかしシャーヒーラー家はこれらのボルークの統治者の地位をほぼ恒常的に掌握することによって、カシュカーイーの生活圏内では、カシュカーイーに対しても非カシュカーイーに対しても支配的立場にあったのである。そしてまた、私有地の存在例のうち三例が、シャーヒーラー家の長期的統治を受ける夏営地・冬営地にある同家の土地である。彼らは夏営地・冬営地のある地域きっての、政治的・社会的・経済的有力者であったと考えられる。

では中・短期間の統治に終わったボルークの場合はどうであろうか。ママッサニーはママッサニー族が多いボルークで、史料でもカシュカーイーの夏営地としてこのボルーク内の特定地方名をわざわざ挙げていることから、後者の主要夏営地ではなかったと思われる。残る四つのボルークは夏営地・冬営地に入っていない。つまりこれらのボルーク、特にママッサニーを除く四つは、カシュカーイーの日常生活との関係が希薄な場所なのである。実はこの四つのボルークの統治権獲得の背景には、シャーヒーラー家の一部と王朝との関係や同家の内部対立があると考えられるが、本稿のテーマからはずれるので、ここでの論述は控える。

おわりに

本稿ではカシュカーイーとファールス地方各地との関係を考察した。考察対象をカージュール朝初期から1300年過ぎまでとしながら、実際には1200年台後半以降に片寄ってしまった。またカシュカーイー全体を扱うことを目指したものの、ほとんどシャーヒーラー家に関する記述になった。しかし、史料の制約上、やむを得ないことと考える。

考察の結果、シャーヒーラー家はカシュカーイーのリーダーであると同時に、夏営地・冬営地のあるボルークの有力者であることが示された。彼らはこれらのボルークの統治者の地位を安定的に保持し、ほとんど非カシュカーイー勢力の介入を許さなかった。逆にカシュカーイーが短期的に統治したボルークが少ないことからわかるように、シャーヒーラー家をはじめとするカシュカーイーが、非カシュカーイーが優勢なボルークに進出することもあまりなかった。つまりカシュカーイーは、ファールス地方知事交替などの政治的变化にあまり影響されずに、ほぼ一定の勢力範囲を保っていたのであり、それゆえ独立性の高い政治勢力であっ

たと考えられるのである。

先に触れたように、シャーヒーラー家の中・短期的ボルーク統治の事例は、同家が一枚岩ではないことを示唆している。今後はこの有力家系の各人の立場や動向を、家系内部、及び王朝など外部勢力との関係の二方向から整理する必要があるだろう。

注

- 1) FNには1304年以降の加筆が若干ある[河田 1995 : 注10]。
- 2) FNには「イルハニ」の称号は、この時初めてファールス地方で使われたと記されているが、実際には、それ以前から用いられていた可能性がある。オバリングはジャーニーの父 Esmā'il がイルハニを称したと記している。ベックによれば、16世紀に活躍したシャーヒーラー家の祖先が、この称号を与えられたかもしれないが、カシュカーイーのイルハニ、イルベギに関する確実な情報で最も早い時期のものは、エスマールがイルベギであったことである [Obering 1974 : 35 ; Beck 1986 : 52-55]。
- 3) FNのボルーク名リストでは76だが[FN : 1640]、このリストには同じボルークを指す複数の地名や、町の名前が含まれており、実際は65である。しかしボルークの数は、統合やファールス地方からの離脱、再編入により変動した。
- 4) FNにおいては「カシュカーイーのハーンたち」とはシャーヒーラー家を指す[FN : 1581]。以下、いちいち断りを入れないが、FNにおける「カシュカーイーのハーンたち」を、本稿ではシャーヒーラー家として扱っている。
- 5) イルハニのモハンマド・コリーが造営した Bāgh-e Īlkhānī と [A'A : 509 ; Afsar 1353 : 279 ; Aryanpour 1986 : 212], ジャーニーかモハンマド・コリー、あるいは両方が手を加えた Bāgh-e Eram [A'A : 511-2 ; FN : 1227 ; Aryanpour 1986 : 320]。
- 6) Masjed-e Īlkhānī [A'A : 435 ; FN : 1219 ; Afsar 1353 : 279], Ḥammām-e Īlkhānī [Afsar 1353 : 279], Boq'e-ye Bībī Dokhtarān [A'A : 457 ; FN : 1192], Ḥoseinīye-ye Īlkhānī [A'A : 498 ; Afsar 1353 : 279]。
- 7) Bāgh-e Behjatābād [A'A : 521], Takīye-ye Pirbanāb [A'A : 489-490 ; Afsar 1353 : 150], Kārvānsarā-ye Chenār [A'A : 273]。
- 8) ベックも19世紀のシャーヒーラー家が、シーラーズの住居とキャンプとの間を、定期的に移動していたかは不明だと述べているが [Beck 1986 : 95], 20世紀にはいると、外部からの圧力に対抗するため、彼らは配下のカシュカーイーとの結びつきを強め、恐らく初めてイルハニが牧地のキャンプに定期的に暮らすようになったとも述べている [Beck 1986 : 125]。
- 9) ペルシア語史料に見られる、1290年以前にシャーヒーラー家がシーラーズにいたことを示す事例には、次のようなものがある。イルハニ就任後のモハンマド・アリーに関するものとして、1245/1829年にシーラーズに行幸したシャーのもとへの伺候 [FN : 741 ; RŞ IX : 724], 1249/1833-4年のファールス地方知事による捕縛 [FN : 757 ; NT II : 124 ; RŞ X : 75], 1250/1834-5年の Fath 'Alī Shāh 没後のシーラーズ混乱時における活躍 [FN : 764]。イルベギ在位時のモハンマド・コリーに関するものとして、1264/1848年の Moḥammad Shāh 没後の内乱での活躍 [FN : 788 ; NT III : 168]。このように特殊な事例であるので、通常時のシャーヒーラー家の行動はわからない。しかし、1866年にファールス地方にいた Mounsey によると、当時、イルハニのモハンマド・コリーは、ファールス地方政庁によつ

て人質としてシーラーズに住まわされていた[Mounsey : 247-8]。

- 10) 例えばカシュカーイーが関わった略奪事件の処理やそれによる投獄[VE : 9, 142, 195, 198], イルベギ変更などカシュカーイー支配に関する用件でのファールス地方政庁からの呼び出し[VE : 11, 16, 39], シーラーズ在住有力者宅への避難[VE : 48], 税滞納による投獄[VE : 92], Esfahān 在住のファールス地方知事への伺候準備[VE : 132, 155], 地方政庁への請願[VE : 170]などの事例をあげることができる。
- 11) *dābet* と *ḥākem* に関して、後者はボルークより広い地域の統治者に対しても使われることがあるといった違いがあるが、ともにボルークの統治者を指す場合の違いは明確ではない。例えばボルーク統治者の他の任務として、ボルークの平定が考えられるが、徴税と密接に関わるこの仕事は、一方のみに課せられるか否か、筆者には未だ不明である。Davies も、この二語は、FN において区別せずに使われていると述べているが[Davies 1984 : 139], *dābet* は徴税の任を担う者としての統治者を指す語だとも記している[Davies 1984 : glossary]。
- 12) カシュカーイーの起源に関する諸説の中に、ハラジュ起源説があるが[FN : 1580 ; NT II : 123 ; Obering 1974 : 29 ; Beck 1986 : 42], カシュカーイーは様々な起源を持つ部族の連合体であるから、ベックも指摘するとおり、どのような説もカシュカーイーの一部にしか当てはまり得ない[Beck 1986 : 43]。ところでクーンコリーのハラジュとして FN の著者が認識しているのは、上述のハラジュではない。FN のハラジュ起源説によれば、Rūm から 'Erāq へ移動したハラジュから分かれてファールス地方に入った集団がカシュカーイーであり、そこからさらに分かれてクーンコリーに定住した一団が、またハラジュと呼ばれたという[FN : 1580]。
- 13) FN : 1120, 1356-1357。この典拠のうち後者では、「現在、統治者(*ḥākem*)は、1309年からイルハニの素晴らしいラクブと地位にある *Ḥājī Naṣr Allāh Khān Sartip-e Qashqā' ī* である」と記されており、明らかに1304年以降に書かれたものである。
- 14) このボルークと Afzar, Khonj は1200年代の中頃、政庁の有力者 Shokr Allān Khān-e Nūri に統治されていたことがある[河田 1995 : 注32]。
- 15) FN の年代記の部分の1247/1832年の箇所では、カーセムは「イルハニの娘婿 *Mīrzā Qāsem Khān-e Khalaj*」と記されているが、このときのイルハニはモハンマド・アリーである[FN : 749]。一方、本文の典拠となっている FN 後半の地誌編では、彼はジャーニーの娘婿と書かれており[FN : 1424], どちらが真実か不明である。
- 16) VE : 34. FN には1270年過ぎ以降、この家系がバヴァーナートを統治することはなかったと記されているが、誤りである[FN : 1266]。
- 17) VE : 70. クーンコリーにはナスロッラーのこの短期間の統治は認められない。
- 18) 本稿で述べた夏営地・冬営地は、ベックやオバリングが恐らく現代のそれとして掲示しているものとはほぼ一致する。最も大きな違いは、彼らの方にはラーレスタンが含まれていないことであるが、この広いボルークは冬営地の端にあたるので、本稿で扱った時代でも、そのごく一部に冬営地がかかっていた程度であったかもしれない[Beck 1986 : MAP 2 ; Obering 1974 : 256]。

参考文献

- A'A : Mīrzā Moḥammad Naṣīr al-Ḥosein Forṣat-e Shīrāzī, *Āthār-e 'Ajam*. repr. Bombay, 1354.
- Abbott : K. E. Abbott, Notes Taken on a Journey Eastwards from Shiraz to Fessa and Darab, Thence Westwards by Jehrum to Kazerun, in 1850. *Journal of the Royal Geographical Society of London* 27 (1857), 149-184.
- Curzon : G. N. Curzon, *Persia and Persian Question* I-II. repr. London, 1966.
- Demorgny : G. Demorgny, Les Réformes Administratives en Perse : Les Tribus du Fars, *Revue du Monde Musulman* 22 (1913), 85-150.
- FN : Ḥāj Mīrzā Ḥasan Ḥoseinī-ye Fasā'ī, *Fārsnāme-ye Nāṣerī*, ed. M. R. Fasā'ī, Tehrān, 1367.
- HA : Moḥammad Ja'far Khūrmūji, *Haqāyeq al-Akhhbār-e Nāṣerī*, ed. Ḥosein Khadivjam, 2nd. ed. Tehrān, 1363.
- Mounsey : A. H. Mounsey, *A Journey Through the Caucasus and the Interior Persia*. London, 1872.
- NT : Mīrzā Moḥammad Taqī Lesān al-Molk Sepehr, *Nāṣekh al-Tavārikh Salāṭīn-e Qājāriye* I-IV. ed. M. B. Behbūdī, Tehrān, 1353.
- RŞ : Redā Qolī Khān Hedāyat, *Tārikh-e Rouḍat al-Şafā-ye Nāṣerī* IX-X. Tehrān, 1339.
- Sheil : M. Sheil, *Glimpses of Life and Manners in Persia*. repr. New York, 1973.
- Stack : E. Stack, *Six Months in Persia* I-II. London, 1882.
- VE : S. Sirjānī (ed.), *Vaqāye' Ettefāqiye*. Tehrān, 1362.
- Afsar, K. (1353) *Tārikh-e Bāft-e Qadīmī-ye Shīrāz*. Tehrān.
- Aryanpour, A. (1986) *A General Survey of Persian Gardens and an Investigation of the Historical Gardens of Shiraz*. Tehran.
- Beck, L. (1986) *The Qashqā'i of Iran*. New York.
- Davies, C. (1984) *A History of the Province of Fars during the Later Nineteenth Century*. Ph. D. diss., St. Antony's College, Oxford.
- Obering, P. (1974) *The Qashqā'i Nomads of Fārs*. The Hague.
- Tapper, R. (1991) The Tribes in Eighteenth- and Nineteenth-Century Iran. In : Avery, P. et al. (ed.) *The Cambridge History of Iran* VII. Cambridge, 506-541.
- 河田久美(1995) 19世紀の Fārs 地方勢力 ボルーク統治権から見た諸勢力の動向 『上智アジア学』13(印刷中).
- 長谷川久美(1992) ヌーリー家とカージャール朝初期のファールス地方 『史林』75(6), 1-32.

(京都大学文学部)